

言語の規範と「国語」辞書

－『大言海』と『大日本国語辞典』を中心に－

邢鎮義*
hjini117@hanmail.net

<目次>

- | | |
|---------------------|-------------------|
| 1. はじめに | 4. 『大日本国語辞典』と上田万年 |
| 2. 近代日本の「国語」と「国語辞書」 | 4.1 上田万年と「国語」辞書 |
| 3. 『大言海』と大槻文彦 | 4.2 『大日本国語辞典』 |
| 3.1 大槻文彦の辞書と言語観 | 5. おわりに |
| 3.2 『言海』から『大言海』へ | |

主題語: 規範(Norms)、国語(National language)、辞書(Dictionary)、大言海(Daigenkai)、大日本国語辞典(Dainihon Kokugojiten)

1. はじめに

「規範」とは「てほん。模範。のつとるべき規則。判断、評価、行為などの抛るべき手本・基準」のことで、単なる「規則」、「基準」ではなく「のつとるべき規則」、「よるべき基準」である。この「規範」を「ことば」に適用して、「言語の規範」というと「用いるべき言葉」となる。

今日の言語生活において辞書は、「正しい言葉」の規範、つまり「用いるべきことば」を示すものとして用いられている。しかしそもそも言葉における「正しい」という価値判断は、自然なものではなく近代国民国家の制度として構築された「国語」において設けられたものに他ならない。

たとえば、辞書は「ことばや漢字を集め、一定の順序に並べ、その読み方・意味・語源・用例などを解説した書」(『広辞苑』7版、1279頁)という解説に基づいて、疑うことなく納得し、それを「正しい」と判断する。しかし、ある辞書に収録されたことばや漢字は、一定の価値判断(標準語)によって選ばれたことばである。従って、そこに選ばれたことばより選

* 韓南大学校教養教育大学 副教授

ばれなかったことばの方がずっと多いが、辞書に載っていることばにのみ、価値をおいて公的なコミュニケーションの道具として認められる。たえず、「国語」という制度、「国語」辞書の規範に注意を払い、議論しなければならない理由である。

近代日本の「国語」辞書の編纂を時代別に分けると、以下のようである。

1. 明治維新前後から大正初期まで—近代的辞書の揺籃期
2. 第一次大戦から第二次大戦まで—大型辞書が完成した時期
3. 敗戦から現在まで

この時代区分は山田忠雄の区分(山田[1967:p.19])であるが、これは近代日本の「国語」構築の時代区分とちょうど重なる。日本は明治維新後、近代国家としての枠組みを立てるため、まず明治4年7月に文部省を設立した。「国民皆学」を通して近代国家を構築するという意図である。そこで最初に取り掛かったのが『語彙』という辞書編纂である。しかし「標準語」のようなことばの基準がなく、辞書編纂は途中で止まった。「国語」なるものを探っていく時期で、「国語の胎動期」であり、「近代的辞書の揺籃期」である。

国民の言語としての「国語」は、1902年に設立される「国語調査委員会」によって本格化する。標準語整備、口語文法、辞書編纂がもっとも積極的に行われた時期で「国語の完成期」であり、「大型辞書の完成期」でもある。

本稿は、日本の辞書の土台となり、日本の国語辞書を二分する辞書として評価される(山田[1981:p.814])『大言海』と『大日本国語辞典』を軸として、「国語」が構築される過程において、「国語」辞書編纂はどのように行われ、日本社会に受け止められたかについて論じたい。なお、今日当たり前のように受け止められることばの「規範」は、どのように作られ、概念化していくか、考察してみたいと思う。とりわけ両辞書の編者として知られる大槻文彦と上田万年は、日本の「国語」構築においても中心的な役割を果たした人物である¹⁾。従って、二人の言語観、国語観をベースにして『大言海』と『大日本国語辞典』を探ってみよう。

このようなテーマに関する先行研究は、社会言語学の研究として、イ(1996)と安田(1997)などが注目に値する。これらの研究は、近代国民国家における制度としての「国語」に注目し、「国語」に注入された国家イデオロギーに対するアンチテーゼを提起している。「国語」辞書の研究に関しては、倉島長正(1996)、山田忠雄(1967)、(1981)などを参考にした。これ

1) このことについてはイ(1996)、安田(1997)、邢(2017)を参照されたい。

らの研究は国語学研究に基づいて「国語」辞書編纂を歴史的に内容的に考察するものである。

本稿は、「国語」辞書編纂を「国語」における国家イデオロギーに対するアンチテーゼの延長線上で論じるものである。「国語」辞書は制度としての「国語」を保証するものとして作られ、受け止められているためである。

2. 近代日本の「国語」と「国語辞書」

近代日本は辞書編纂を国家事業として進めた。そもそも近代国家は「一つの共同体」という意識の上で成り立つものであるが、それを実現するためには、同じことばを使うことで連帯感を持たせることが求められる。そのために取られたのが、「国語」政策、具体的には標準語政策であり、辞書編纂である。倉島長正は「国語」と「国語辞典」の関係について、次のように述べている。

「国語」の歴史は「国語辞典」の歴史でもあります。相互に影響し合って、先になり後になりそれぞれに変貌を遂げてきました。もとより「国語辞典」は「国語」を読んだり使ったりするために存在するものではありませんが、これが「国語」ですと示す目録のような役割を果たします。国際社会にあって対外的にはまずその役割が問われます。明治二十二年『言海』が刊行されるや、時の指導者たちはこれを大いに喜び称賛したのであります。『言海』に次ぐ画期的な辞書は大正四年から刊行された『大日本国語辞典』であります。第一次世界大戦に参戦していた日本は、その年中国に二十一カ条の要求を突きつけます。『大日本国語辞典』はその名が象徴するように、国威宣揚の担い手としても大いに役割を果たしたのであります。昭和七年には三つ目の歴史的な『大言海』の刊行が始ります。この年満州国建国が宣言されています。『大言海』も大いに国威宣揚の具とされ、その風潮に載って爆発的な売れ行きをも示すのでした。(倉島1997： -)

「国語」の歴史は「国語辞典」の歴史である」という考え方は、既述のように、日本の「国語」構築の時代区分と「国語辞典」の時代区分がほぼ同時進行で行われたことから確認できる。「国語」の規範として「国語辞書」が必要であり、「国語辞書」は「国語」なるものとしての「保証」がなければ機能することができない。お互い認め合い、補い合いながら存在してきたのである。

なお、国語辞書は単なる「ことばの意味を調べる本」だけではなく、対外的には「国威宣揚」のシンボルとしての役割を果たしたという指摘には注意を払う必要がある。「国語」の完成期であり、大型国語辞典の完成期でもある大正から昭和初期は、第一次大戦と第二次大戦が行われた時期で、辞書は対外的に国力の象徴としてその役割が問われたのである。即ち、『大日本国語辞典』や『大言海』は、その当時、国威宣揚の担い手として認識された。

「『大日本国語辞典』はその名が象徴するように、『大言海』における「時としては、国語愛・国俗愛・祖国愛の心情を呼び起こす種ともなるであろう」(倉島[1997:p.209])という言及から、当時この二つの辞書がどのように語られ、位置づけられたかがうかがえる。

しかし、このことは日本に限らず、他の近代国家が同じプロセスを辿ってきたといえる。英語社会におけるウェブスターの英語辞書もドイツのグリームも同じ思いで編纂された。この時代は国語辞典が国家の力であり、競争力であったのである。辞書が単なる「言葉の意味を調べる書籍」ではないこと、国語辞書に注入された「国家主義」には注意を払う必要がある。

3. 『大言海』と大槻文彦²⁾

3.1 大槻文彦の辞書と言語観

まずは、『言海』と『大言海』の著者である大槻文彦(1847~1928)について、触れておきたい。大槻は『広日本文典』の著者としても知られている。文法書である『広日本文典』と『言海』、『大言海』はそれぞれ密接につながっているため、本節では、この三書を手がかりにして、大槻文彦の言語観や国語観について述べることにする。

『言海』は日本の近代辞書の嚆矢と評価されるもので、明治8年着手して同24年に完成した。そして『広日本文典』は明治11年着手して同15年に脱稿し、「語法指南」と題して同22年に刊行する『言海』の巻首に収められる。それをさらに整備して明治30年『広日本文典』として刊行する。つまり、『言海』と『広日本文典』は、ほぼ同時進行で行われたとみることができる。

2) 刊行年度は『大日本国語辞典』が大正4年、『大言海』が昭和7年であるため、『大日本国語辞典』から論を始めるのが妥当とも言えるが、『大言海』は『言海』を土台にしているので、比較検討も必要である。従って、『大言海』から論じたいと思う。

大槻は『言海』において、辞書と文法の間を、次のように述べている。

(四)辞書ハ文法ノ規定ニ據リテ作ラルベキモノニシテ、辞書ト文法トハ、離ルベカラザルモノナル。而シテ文法ヲ知ラザルモノ、辞書ヲ使用スベカラズ、辞書ヲ使用セムホドノ者ハ文法ヲ知レル者タルベシ。(『言海』、p.4)

大槻は辞書を単なる「ことばの羅列」ではなく、一定の規定(文法)を立てて並べるものとして認識していた。したがって、規定(文法)を知らなければ辞書を使うことができず、辞書を使おうとすると文法を知らなければならないのである。このような認識を明治初期、すでに持っていたことは、これらが文法書としても辞書としても「嚆矢」といわれる所以でもあって、注目に値する。それでは大槻は「文法」については、どのように考えていたか見ておきたい。

方今我国ノ文学ニ就キテ最大ノ欠典トスルハ、日本文典ノ全備セル者ナキナリ。是ナキハ独我国文学ノ基礎立タザルノミナラズ、外国ニ対スルモ真ニ外見悪シキ事ナラズヤ。一中略一又今言ノ文典ニ就テハ世ニ未ダ其撰アラズ。而シテ議者ノ立説モ亦各異同アリ。其文法ヲ論ズル者ハ、或ハ古今ヲ折衷セント云ヒ、或ハ直ニ普通ノ俗語ニ文法ヲ附シテ用キント云ヒ、又其文字ヲ論ズル者ハ、或ハ漢字仮名字ヲ混用スルコト現金ノ文体ノ如クセント云ヒ、或ハ単ニ仮名字ノミ用キント云ヒ、或ハ全ク洋字ニ改メント云ヒ、一中略一今言ハ繁雜ニシテ訛謬モ百出ス。故ニ今其文法ヲ定メントスルニハ、古言今言、其難易ノ差アルコト知ルベキノミ。依テ愚案ニハ、今ニ当テ先ゾ一大全備ノ古言文典ヲ編スベシ。(大槻1902/2002 : pp.13-14)

この文章は明治8年に書いた文章で、もっとも注意を払わなければならないのは、「今言」、「今言の文典」という表現である。「今言」は、「今使われる言葉」という意味で、近代日本の標準語の概念、「実際に東京で使われる教育ある人々の言葉」と同じ言語観である。『言海』のもっとも大きな特徴といえる「普通語の辞書」という概念も、この言語観によるものである。明治初期、漢文が言語のすべてとして機能していた時期に、日常の話言葉の文法を考えたことは、大槻の洋学基盤の言語観に起因するものであると思われる。そしてこの言語観は文法だけでなく、大槻文彦の辞書編纂や日本語に関するすべての研究を貫いている。

なお、上の文章でもう一点注目したいのは、「是ナキハ独我国文学ノ基礎立タザルノミナラズ、外国ニ対スルモ真ニ外見悪シキ事ナラズヤ」というところである。大槻自身、1862

年、16才の時から英学、数学を学び、早くから西洋の言語学の流れをつかんでいたと思われる。いわゆる西洋列強の言語研究の方向や進み具合を熟知していた大槻としては、日本の辞書や文法の有無が日本を表すものとして認識していたのである。

『言海』と『広日本文典』は大槻の言語研究の初期を飾るものとして、日本の「国語」が構築される前に完成し、その後の辞書編纂や文法研究の土台となる。それにたいして『大言海』は、「国語」なるものが構築されて、本格的な大型辞書として編纂された。『国語学大事典』には『大言海』について、次のように記されている。

本書は同じ著者の普通語辞典『言海』(明治二十四年、1891)を大増益したもので大久保初男らがその志をつぎ、関根正直・新村出の指導を得て、著者の死後、完成した。本書の組織は、『言海』の大意に見える通りである。専門語・固有名詞を除いて採集した単語・熟語は、方言(国語調査委員会の調査による)・近世語・近代語をも含んでいて、近代的辞書としての体例を備えているが、古語を中心とする点では先行の『大日本国語辞典』と同じである。各見出し語について原則として、歴史的仮名遣・発音・品詞・通用の漢字表記・語源・語釈・出典に順に整然と説かれ、配列は五十音順(「ん」は「む」に合わせてある)である。語源について説くことは他書に見られない特徴であるが、これには正当でないものも多い。(『国語学大辞典』、p.578)

上記の文章には、『大言海』の収録語数について、「『言海』を大増益したもの」とのみ記しているが、石山などの調べによると約98,000語(石山[2004:p.62])である。そして著者についても、「大久保初男らがその志をつぎ、関根正直・新村出の指導を得て、著者の死後、完成した」となっているが、『言海』と同様、ほぼ大槻文彦によるものである。

『大言海』を刊行した富山房の『富山房五十年』に、「昭和三年一月御発病、二月十七日八十二歳を一期として遂に御逝去になったのであったが、原稿は九分九厘出来て居った」と記されている。なお、大正8年には「本書編纂に当りて」を著したことなどから、『大言海』は大槻の業績とみてもよかろう。『言海』が「普通語」の辞書であったとすると、『大言海』は近世語・近代語などを含んである点、とりわけ「語源」調査に力を入れている点は、『大言海』の特徴と言える³⁾。

大槻文彦は、「本書編纂に当りて」において、辞書の在り方や語源の重要性について、次のように述べている。

3) しかし『大言海』の語源については、「『大言海』に対する風当たりの最も強いのは、語源解についてであろう(山田1967; 45)」という山田忠雄の指摘などから察することができるが、誤謬などで批判されることも多い。

「最近の物の注釈には困却すること尚多し、たとへば、飛行機の如き、骨折りにて調べて、その構造など記すに、半年過ぎぬに、その製造、全く変ず、かくては二三年も経なば、辞書の解は誤となりて、却て人を惑はすこととなるべし、其外、郵便規則の如き、頻繁に改正せられ、酒醬油の醸造の如き、日々新製法起る、されば、此の如きものは、漠然と記し置くこととせむとす、飛行機は、人の乗りて空中を飛行する機械、とやうにして、其専門の書に譲るべし。目前の物事は、現在、其道の人に聞かば知られむ、辞書は、古き書を読み、不審なる語にあへる時、引きて見るといふこと多ければ、余は、古き語に力を致すべし、新しきには、作者、自ら其人あるべし。」(『大言海』1、「本書編纂に当りて」、p.21)

大槻は文法においても辞書においても「今言」、現在使われる話し言葉に重点を置いている。当然のことながら、ことばの変化に敏感に反応せざるを得ないのである。近代国家の発展と共に目まぐるしく変る時代において、辞書はどのようなことばを収録すべきかについての考え方が述べられている。要するに、新しい発展に関する語は、「その道の人」に聞いて、自分は言語学の専門家として「古き語」、語源に力を入れると述べているのである。それは語源に日本語の根をもとめ、国語の歴史的正当性や正統性を与えようとする大槻の国語観が働いているといえる。

それでは、明治24年完成した『言海』と昭和7年完成する『大言海』を通して、約40年の間、近代日本のことばの規範はどのように変っているのか、見ておきたいと思う。

3.2 『言海』から『大言海』へ

『大言海』が『言海』を土台にしていることは、言うまでもない。『大言海』の「本書編纂に当りて」は、次のような文章から始まる。

初、編輯の體例は、簡約なるを旨として、收むべき言語の區域、または解釋の詳略などは、およそ、米國の「エブスター」氏の英語辭書中の「オクタボ」と云ふ節略體のものに倣ふべしとなり。おもへらく、「オクタボ」の注釋を翻譯して、語ごとに埋めゆかむに、この業難からずとおもへり。これより、従來の辭書體の書、數十部をあつめて、字母の順序をもて、まづ古今雅俗の普通語とおもふかぎりを採取分類して、解釋のありつるは併せて取りて、その外、東西洋おなじ物事の解は、英辭書の注を譯してさしいれたり。(同、p.1)

『言海』に引き続き『大言海』も、エブスターの英語辭書に倣っていること、古今雅俗の

普通語とおもふかぎりを採取分類していることなど、既述の大槻の言語観が『言海』から『大言海』まで一貫していることがわかる。

そして『大言海』のもっとも特徴といわれる語源については、次のように述べている。

銀杏の成る「いちよう」といふ樹あり。この語の語原、并に假名遣は、難解のものとして、語学家の腦を悩ましむるものにて、種種の語原説あり。この語の最も古く物に見えたるは、一條禪閣兼良、公文明十三率八十歳にて薨ずの尺素往來に、「銀杏」とある、是れなるべし。文安の下学集にも、「銀杏・異名鴨脚、葉形、如二鴨脚一」とあり。字音の語の如く思はるれど、如何なる文字か知られず。黒川春村大人の碩鼠漫筆に「唐音、銀杏の轉ならむ」などあれど、心服せられず。降りて、元祿の合類節用集に至りて、「銀杏、鴨脚子、」と見えたとれど、是れも如何なる字音なるか解せられず、正徳の和漢三才圖會に至りて、一銀查鴨脚子、俗云、一葉」とあり。始めて、一葉の字音なること見えたり。(中略)十分に了解せられざれど、外に據るべき説もなければ、余が曩に作れる辭書「言海」には、姑らくこれに従ひて「いてふ」としておきたり。

(同、pp.6-7)

「銀杏、いちよう」のことを『言海』では「いてふ」としたが、『大言海』において「いちよう」にした理由と語源が記されている。

大槻の「語源」に関する考え方がよく現れているが、これにはなお、「国語」なるものの歴史的根拠を記したいという「国語観」もうかがえる。近代国民国家における「国語」は、すべての「国民」が使う言語として、「正しい言葉」としての言語的価値判断に基づいた正当性と歴史的正当性が求められるのである。

それでは、『言海』と『大言海』の見出し語「あ」の部分、簡単に紹介しておきたいと思う。

『言海』

- ① あ 五十音圖、阿行第一ノ仮名。此ノ一行ノ仮名。あ、い、う、え、おノ五音ハ喉ヨリ単ニ出デ、又發聲ノ韻トモナリテ、熟音ヲ成サシム、故ニ単音、又母音ノ称アリ。あハ、下ニう、或ハふ(うニ転ジテ呼ブモノ)ヲ受クルトキハ、おノ如ク呼ブコトアリ。あうむ(鸚鵡)、あふぎ(扇)ノ如シ。
- ② あ(代)吾 われニ同じ。「一が妻」「一が君」「一が兄」
- ③ アイノ(名) 蝦夷語、其人種ノ自称。

『大言海』

- ① あ 五十音圖、阿行第一ノ仮名。此ノ一行ノ仮名。あ、い、う、え、おノ五音ハ、喉ヨリ単

一ニ出デ、又發聲ノ韻トモナリテ、熟音ヲ成サシム、故ニ単音、又母音ノ称アリ。

あハ、下ニ、う、或ハふ(うニ転ジテ呼ブモノ)ヲ受クルトキハ、おノ如ク呼ブコトアリ。あ
うむ(鸚鵡)、あふぎ(扇)ノ如シ。

② あ(代)吾・我 [漢語我ト暗合、朝鮮ノ古語ニモ、あと云フトゾ]自称ノ代名詞、多クハ、あ
れ、われト云ふ。古事記、上四十二長歌「阿ハモヨ、妻ニシアレバ」景行紀四十年十月「吾妻
者耶」應神紀、十三年三月、長歌、「阿ガ心シ彌于古ニシテ」万葉集、十二「吾妹子ガ、阿ヲ偲
ブラシ、草枕、旅ノ丸蔕ニ、下紐解ケヌ」

③ アアクライト(名)孤光電燈 [英語、Arc-light]

それぞれ①は「あ」の最初の見出し語、②は両辞典で重なる見出し語、③は外来語の例で
ある。『言海』から『大言海』まで見出し語の表記は、和語、字音語はひらがなで、梵語、外
来語はカタカナ表記を採用している。しかし語釈は漢字とカタカナで表記している。そし
て見出し語のひらがな表記のうち、変体仮名も採用している。その理由について、「凡例」
に次のように説明している。

(五十八) 本書中ニ、書スル平假名ニ、二種アリ、其類別、左ノ如シ。

第一種、平假名 な。ふ。ま。と。す。

此類ハ國語ノニミ用キタリ。但シ、まハ漢語ノ中ニ用キタルモアリ。

第二種、平假名 ふ。こ。し。と。そ。

此類ハ、漢語ノニミ用キタリ。然レドモ、しトハ國語ノ語中、語尾ニ用キ
タルモアリ

つまり、漢語と國語を区別して、仮名遣いを採用していることになる。大槻文彦はひら
がなにおける日本語の表記体系の歴史を『大言海』において具現しようとしたのである。す
なわち、同辞典を通して言葉の意味の解説だけでなく、表記体系の背景または淵源を明ら
かにしたいという言語観がうかがえる。同辞書において語源にこだわる立場ともつながっ
ていると言える。

なお、見出し語「あ」をみると、上にあげた例を含め、『言海』は六つの「あ(代)彼/あ(感)あ
あ(感)」を出しており、『大言海』は十二の「あ(名)畔/あ(名)足/あ(名)唾/あ(代)彼/あ(感)阿/あ
(感)噫/あ(接頭)阿/ああ(副)/ああ(感)阿阿」を出している。

そしてたとえば、両辞典で見出し語の重なる②「あ(代)吾」の解釈をみると、『古事記』、
『万葉集』などまで語源を遡っている。これらの書籍は明治以降、天皇制の理論的、歴史的

正統性を担保する根拠として盛んに出されていた。言語的にも『古事記』や『万葉集』に「国語」の根拠を見い出そうとする言語観は興味深い。

そして『言海』には時代的背景もあって、英語からの外来語より、梵語、アイヌ語などが多い。それに比べ『大言海』には英語の単語が多く見られる。なお、外来語はカタカナ表記をしている。

なお、動詞「打つ」をみると、『言海』においては「うつ(他動)打 撃 (一)強ク当ツ。タタク。ブツ。」というふうに解説し、(二十二)まで用例をだして解説しているのに対し、『大言海』では「うつ(他動)打 撃 (一)強ク当ツ。タタク。ブツ。古事記、下(允恭)長歌、篠葉ニ、宇都ヤ霰ノ、タシダイニ、寢ネテム後ハ」といった類で、(三十)の用例を出している。

収録語数約39,000語の『言海』から98,000語の『大言海』は、約40年の差があって収録語数は倍以上増えているが、形式や基本的な解説は同様に、語源を入れているところが異なる⁴⁾。大槻がとりわけ語源に力を入れていることは、「国語」の歴史的正当性を裏付ける目的があったと思われる。

4. 『大日本国語辞典』と上田万年

4.1 上田万年と「国語」辞書

上田万年(1867~1937)は、近代日本の「国語」の根幹を築いた人物として、「国家」という概念すら薄かった明治中期、ドイツ留学を通して「国語」という概念を日本にもたらした。今日当たり前のように思っている「国語」=「母語」の思想や、「国民の言語」としての「国語」というイデオロギー、国語の基盤となる「標準語」の概念などは、上田万年によって流入されたものである。従って、近代日本の言語の規範としての辞書について語る際、上田万年が持っている辞書に関する考え方を見ておく必要があると思われる。上田は1889年の論文「日本大辞書編纂に就て」において、近代国家と辞書の関係を次のように述べている。

そもそも一国に善き辞書なきことは、外にありては一国の学者なきこと、即ち一国人民の知識

4) 用例の差と解説の異なる点についての考察も必要である、その点については、次回の研究で扱う予定である。

の欠乏することを、示すものにして、内にありては学徒修学上、一大障碍をいたし、従って学問発達の妨害をなすものなれば、苟も国の名誉を思ひ、国を利益を計るものは、深く茲に鑑みさるべからざるものなり、(略)(上田[1889 : pp.61-62])

一国の「善き辞書」の有無を、学者の有無、人民の知識と同一視し、国の名誉と利益につなげる論理は、既述の大槻文彦の『広日本文典』における「日本文典ナキハ独我国文学ノ基礎立タザルノミナラズ、外国ニ対スルモ真ニ外見悪シキ事」という論理と似通っている。上田万年がこの文章を書いた1889年は『言海』第一巻が完成し、社会的に多いに歓迎されていた時期である。つまり、この当時は、まだ形作られていない「国語」の概念を作っていく時代として、文法の整備、辞書編纂などを「国家事業」、「国力」として位置づけるのが、一種の流行りのような雰囲気であったといえる。このような認識は戦前まで強固に続いた。今日は少しは薄くなったが、「国語」に対するナショナリズムは、「母国語」、「国語愛」といったイデオロギーとして、依然と続いているといえる。

さて、日本の「国語」構築は、1902年上田万年が中心となって管制施行された「国語調査委員会」によって、はじめて政策の対象となった。言語が国家政策の対象となるということは、言語が制度として生まれ変わることを意味する。言語が制度として生まれ変わるためには、それなりの整備が施されなければならない。「標準語」制定、口語文法の整備、それに基づいた「辞書編纂」などである。「標準語」は「国語」構築においてもっとも重要なキーワードであるが、「標準語」は口語文法と辞書の存在が前提となるのである。既述の倉島の「国語の歴史は国語辞書の歴史である」という発言はこのことを意味する。繰り返しになるが、大槻文彦が『言海』と『広日本文典』を同時進行で進めた理由でもある。

それでは上田万年共著となっている『大日本国語辞典』はどのように作られ、どのように規範を示しているか、考察してみたいと思う。

4.2 『大日本国語辞典』

『大日本国語辞典』の編纂過程について、同辞典を刊行した出版社である富山房の『富山房五十年』には、次のように記されている。

明治二十五年 この年より約六ヶ年間参考書籍の渉猟募集に費す

明治三十一年四月 この年より約五か年間前期参考書の便覧索引製作に従事す

明治三十六年七月 編纂開始、その後第一巻発行に至るまで編纂と同時に校正に従事す
大正三年十月 略原稿全部出来
大正四年十月 第一巻発行・大正五年十月 第二巻発行・大正六年十月 第三巻
発行・大正六年十二月 第四巻発行・大正九年二月 索引に着手・昭和三年四月索
引校正終了・昭和三年九月 索引発行。(『富山房五十年』、p.540)

この記述によると収録語数、約20万余語と言われる⁵⁾『大日本国語辞典』は、大正4年、第一巻が刊行され、昭和3年に完成した。着手から考えると36年かかったことになる。明治25年から参考書籍の渉猟募集に取り掛かったということは、明治24年に『言海』の第四巻が完成したので、それとほぼ同時に、次なる辞書として大型辞書の編纂の準備に取り掛かったと見ることができる。この時期の日本社会の辞書に関する要求の雰囲気がかがえる。

『大日本国語辞典』は上田万年・松井簡治共著共著となっている。しかし明治25年の準備段階からほぼ松井簡治の力によるものである。保科孝一の次の回想も、それを物語る。

上田博士がもっぱら刊行に関する方面、松井博士が編纂より印刷に至るまでの一切の責任を担当されたと聞いているが、編纂準備に着手せられてから印刷を了するまで松井博士の半生にわたる献身的努力と苦心とは実に涙なしには聞くことの出来ないものであった。(保科[1928:p.3])

既述の『富山房五十年』によると、同辞典は明治25年から準備調査が始まり、同36年から編纂が開始されたことになる。上田万年は1902年、「国語調査委員会」をつくり、「標準語」制定のための方言調査とそれに基づいた「口語文法」整備など、いわゆる「国語」づくりを最前線で指揮していた時期である。おそらく、見出し語の調査などの編纂実務はもっぱら松井簡治が行い⁶⁾、上田万年は「刊行に関する方面」、つまり出版社との交渉、同辞典の権威

5) 現在はコンピューターなどで収録語数を正確に数えることができるが、この当時は大型辞書は収録語数を正確に数えなかったらしい。犬養守薫は「近代国語辞書編纂史の基礎的研究」において「ところで、『大言海』は、『大日本国語辞典』とともに昭和前期を代表する国語辞書であるにもかかわらず十分に研究がなされているとは言えない段階に止まっている。このことは統計的・数量的な問題についても同様な状況で、田中章夫氏に『大言海』の見出し語の総量10万という概算の報告が見られる程度で、詳細な検討はいまだになされていない。」(犬養[1999: p.255])と述べていることから、状況がかがえる。松井簡治の『大日本国語辞典』編纂過程については、次のような証言もある。「独力克く此の辞書を成した博士は二十年間、毎朝三時から八時までの五時間を執筆時間に充て、一年三百日を仕事美とし、遅延分は夏休みに中に取返した由、その驚くべき計画性は辞書家の以て範とすべきところである。」(山田1981: p.786)

6) 「松井簡治は、『大日本国語辞典』の原稿執筆に当り「一日三十三語、二十年六千日」でまとめると計画したといひます。驚くべきことは、その通り実行して予定通り全巻を完結させたことであります。」

を保証するための役割などをしたと思われる。松井簡治も「書肆との交渉、其の他に就いて、博士は絶えず斡旋の勞を執られたのであるから、博士なかりせば、或ひは本辞典の刊行其ものも出来なかつたかも知れない」と、同辞典の序文にて述べている⁷⁾。松井簡治も「国語調査委員会」の委員として加わっており、同辞典は上田万年と同委員会の方針や言語観が反映されたものと見てよからう。

『大日本国語辞典』について、簡単に紹介しておきたい。

まず「凡例」は、次のように記している。

一 本書に收めたる語彙

一 本書には上古語・中古語・近古語・近代語・現代語其の他普通の學術専門語、及び外來語の通用語となれるものは悉く之を收めたり。漢語の國文學の上に表はれたるものも廣く之を收拾して讀書の便に供せり。方言は古書の上に表はれたるもの、及び現在東京京都地方に行はれたるもののみを取り、諸國のは、他日別に方言辭書編纂の時を期し、今は之を省きたり。

同辞典の基本方針として、見出し語の語彙の範囲は、時代的には古語から現代語まで網羅し、普通語だけでなく學術専門語も入れている点が『大言海』と異なる。そして地域の言葉、つまり方言は古書に現れたもの、及び「現在東京京都地方に行はれたるもののみを取り」としている。このことは、「東京の教育ある人々の言葉」という「標準語」の方針と、京都の歴史的根拠を基準として見出し語を選別したことになる。

そこで完成した『大日本国語辞典』の見出し語の「あ」をみると、「あ 五十音図の最初の仮名、即ち阿行阿列の仮名。伊呂波歌にては第三十六の仮名。」とし、「字体」、「表わす音」、「一、表音的仮名遣い」、「二、歴史的仮名遣い」とタイトルをつけて仮名遣いについて二段にかけて詳しく解説する。

近代日本の「国語」は「国語国字問題」といわれるくらい、表記に歴史的仮名遣いと表音仮名遣いで葛藤が激しかった。日本の伝統を重んじる保守派は、歴史仮名遣いを主張し、「国民」教育のためには学習に容易であることが求められるという改革派は、表音仮名遣いを主張する流れは、終戦まで続いた。上田万年をはじめとする「国語調査委員会」は表音仮名遣いを主張しており、同辞典において「表音的仮名遣い」と「歴史的仮名遣い」を別の項目に立

(倉島, p.189)

7) 『広辞苑』も新村出編となっているが、実際は新村出の次男新村猛が中心となって67名の専門家が完成した。それにもかかわらず未だに、新村出編『広辞苑』として通している。今日でも同じことがいえるが、編者の権威 = 辞書の権威というふうを受け止められることが往々にしてある。

てて説明していることは、その認識を反映したものであろう。

引き続き、見出し語「あ」には、「あ 畔(名)あ 足(名)あ 網(名)あ 唾(名)あ 吾 我(代)あ 彼(代)あ 有(自動)あ 嗟(感)あ(感)阿」の九つの語を出している。なお、品詞名の位置が『大言海』では「あ(名)畔」というふうにしたが、同辞典は上のように、品詞名を漢字の次につけている。今日は『大日本国語辞典』のようにつけるのが一般的となっている。

外来語は「あーく(英 Arc)(名)」のように、ひらがなで表記している。『大日本国語辞典』は、和語、字音語、外来語、及び語釈においてもすべてひらがな表記をしているのである。

動詞「打つ」を見ると、「うつ 打 撃(他動) (一)たたく。ぶつ。うちて鳴す。記「篠葉に、宇都や霰の」、萬「みな人をねよとの鐘は打なれど、君をしもへばいねがてぬかも」同「時もりが打なす鼓よみ見れば、時にはなりぬあはなくもあやし」勢語「俄に親、この女を追ひうつ」といった類で、(三十二)まで用例が続く。

『大日本国語辞典』は、時代的、分野別に網羅した20万余語を収録した点に加え、上田万年の名声もあって、形式の面においても、内容の面においても今日にまで影響を与えている。

5. おわりに

言語に規範をあてること、つまり話し言葉を整備して規範化することは、自然な行為ではない。近代国家の制度として「つくられる」ものである。それが「国語」であり、上田万年と大槻文彦はその中心的な役割を果たした人物である。

そこで本稿では、今日の「日本の辞書の土台」と評価される大槻文彦の『大言海』と上田万年の『大日本国語辞典』を中心に、「国語」構築の文脈において「国語辞書」、とりわけ本格的な辞書の出現といえる大型辞書がどのように作られ、日本社会に受け止められたかについて考察した。

大槻文彦は明治24年『言海』を完成し、それを土台に『大言海』を編纂したが、それは出版社富山房の強い要望からだという。『大日本国語辞典』も同じ出版社から刊行される。明治末期、つまり1902年、「国語調査委員会」による本格的な「国語」づくりの流れのなか、大型辞書の社会的な要望がうかがえる。そして両辞書は「太陽的出版」、「国民最高の典籍」など

と讃えられた。国民国家意識の高揚を表わす。

『大言海』は、『言海』と同様、和語、字音語はひらがな表記、外来語はカタカナ表記を採用している。そして変体がなを採用している。解説においてもほぼ同様だが、語源の解説を細かく入れている。語源、すなわち言葉の根、歴史に関する大槻文彦の考え方は、表記にも形式にもよく現れており、『大言海』の「他書に見られない特徴」という『国語学大事典』の評価を裏付けているといえる。

『大日本国語辞典』は、上田万年・松井簡治編である。編纂の実務は松井簡治が行ったが、出版の全体的企画は上田万年の名において行われたので、上田の言語観、つまり当時の「国語調査委員会」の「国語観」が大きく働いたと思われる。20万語を越える当時としては超大型辞書として、収録語は古代から現代、学術専門用語、外来語を網羅している。表記においては、和語、字音語、外来語すべてひらがな表記を採用している。

現在日本でもっとも大型辞書と評価される小学館の『日本国大事典』は、語源の解説がかなり省略されている。文法も品詞名も変わるので、辞書の品詞名も変わる。当たり前のようだが、辞書の基準も規範も時代によって変わるのである。「国語」の在り方も変り、「国語」ではなく「日本語」というべきであるとの主張も1990年代後半から登場した。辞書の規範、本稿では『大日本国語辞典』と『大言海』を、代表編者を中心に「国語」構築の文脈において論じた。したがって具体的な見出し語の分析や比較検討は、次回の研究で取り扱う予定であることを断わっておきたい。

【参考文献】

- イ・ヨンスク(1996)『国語という思想』岩波書店
 石山茂利夫(2004)『国語辞書事件簿』草思社、p.64
 犬養守薫(1999)『近代国語辞書編纂史の基礎的研究』風間書房
 上田万年(1889)「日本大辞書編纂に就て」『東洋学会雑誌』第三篇第二号、pp.61-74
 _____(1895)「標準語に就きて」『帝国文学』第一卷一号、p.17
 上田万年・松井簡治編(1915)『大日本国語辞典』富山房
 大槻文彦(1875)「日本文法論」『復軒雜纂』(190/2002)に所収 鈴木広光校注、東洋文庫、pp.13-14
 _____(1897)『広日本文典』東京築地活版製造所、p.44、p.49、p.154
 _____(1931/2012)『言海』武藤康史解説、ちくま学芸文庫
 _____(1932)『大言海』富山房
 倉島長正(1996)『「国語」と「国語辞典」の時代 上—その歴史』小学館
 国語学会編(1984)『国語学大事典』東京堂出版
 関根正直(1928)「大槻博士を憶ふ」『国語と国文学』第五卷第七号

- 東京大学国語国文学会(1928)「大槻文彦博士年譜」『国語と国文学』第五卷第七号
早川勇(2001)『辞書編纂のダイナミズム』辞游社
刑鎮義(2017)「近代日本の「国語」と大槻文彦の言語観」『日本文化学報』第74輯
富山房出版年史(1936)『富山房五十年』富山房
古田東朔(1969)「大槻文彦伝(三)」月刊『文法』7月号
_____(1976)「文法研究の歴史(2)」『岩波講座日本語6』岩波書店
保科孝一(1928)「大日本国語辞典 批評集」富山房
安田敏朗(1997)『帝国日本の言語編制』世織書房
_____(2006)『辞書の政治学』平凡社
山田忠雄(1967)『三代辞書—国語辞書百年小史』
_____(1981)『近代国語辞書の歩み 上』三省堂

논문투고일 : 2021년 09월 30일
심사개시일 : 2021년 10월 18일
1차 수정일 : 2021년 11월 08일
2차 수정일 : 2021년 11월 15일
게재확정일 : 2021년 11월 20일

 <要旨>

言語の規範と「国語」辞書

刑鎮義

「国語」は近代国家において構築された制度である。「国語」はすべての国民が使用する言語として均一性が求められる。均一な言語によって連帯感をもたせるのが「国語」の役割である。標準語、文法、辞書がその役割を果たす。『大言海』と『大日本国語辞典』本格的な辞書の時代を開いた大型辞書で、刊行当時「国民最高の辞典」、『国威宣揚』と評価され、戦前の日本の国力の象徴であった。大槻文彦による『大言海』は明治22年の『言海』を土台にしている。98,000語を収録した同辞典は、語源の研究がもつともの特徴である。『大日本国語辞典』は上田万年と松井簡治によるものである。上田は日本の「国語」構築を指揮した人物である。20万語を収録した同辞典は古語、現代語、学術専門語などを網羅している。両辞典は現在の日本の辞書の土台となっている。言語の規範は常に変るもので、辞書の規範と国家主義は区別して見なければならぬ。

Norms of Language and Japanese Dictionary

Hyong, Jin-I

The National language is a system created in modern countries. The National language seeks unity as a language used by all citizens. Standard language, grammar, and dictionaries play a role. 'Daigenkai' and 'Dainihon Kokugojiten' were the first large-scale dictionaries in Japan. Both dictionaries were evaluated as 'the nation's best dictionary' and 'promoting national prestige'. The two dictionaries symbolized Japan's power with the victory of war from the 1910s. Otsuki Humihiko created 'Genkai' in 1889. 'Daigenkai' is an evolution of 'Genkai'. It contains 98,000 words. 'Daigenkai' is characterized by the study of the etymology of the word. 'Dainihon Kokugojiten' was created by Ueda Kazutosi and Matsui Kanji. In particular, Ueda is the creator of the Japanese language. 'Dainihon Kokugojiten', which contains 200,000 words, contains all of ancient, modern, technical and academic terms. Both dictionaries form the basis of the present-day Japanese dictionaries. The norms of language are always changing. A distinction must be made between dictionary norms and nationalism.